

絶望にあっても闘いそして挑戦するダリット女性

ブルナド・ファティマ

インドは独立 60 年を迎えました。今や、毎年二桁台の経済成長を遂げているインドは国際政治と経済の舞台において重要で有力な位置につくようになりました。このインドの成功を支えているのは、高等教育を受けた豊富な人材、「民主的で安定した」政治状況、そして国内外の投資家に対する土地・利益・資源の約束であり、それらはすべてダリット女性の搾取の上に成り立っています。事実、インドは今もって妊婦の死亡率、女児殺害と胎児殺し、予防可能な疾病が原因の死亡をはじめ人間の発展を示す指標において世界の最後尾に置かれています。2007 年の今日現在においても、ウッタルプラデシュ州ライタラ村のある農場で、奴隷のように働かされているダリット家族の 5 歳の少女が餓死寸前に追いやられています。同じように、弱い立場にある農村の女性たちも、この国の二面性の狭間でさまざまな影響を受けています。これらの悪いほうの指標は常にダリット女性の間に見られます。

ダリットおよび周縁に追いやられた人びとは、カースト差別から自由になることなく、今も封建的な領主であるエリートたちにより支配されています。インド人は植民地支配者を国外に追いやりましたが、ダリットを差別してきた支配者たちは今も国内にいます。さらにダリット女性たちは、家父長制の犠牲にもされてきました。ダリット女性たちはカーストと性別分業の二重の重荷に耐えています。ダリット女性たちは卑しめられ、その身体は他カーストの男たちが自由に支配できる領域にされています。ダリット女性たちはあらゆる権利と機会を奪われ、経済や教育の構図の中で最底辺に置かれています。彼女たちは貧しく、無学で、性的に脅かされ、国家とカースト制度の暴力にさらされています。二重、三重あるいは複合的に差別を受けているダリット女性たちは、日常においてさまざまな闘いに立ち向かっています。さもなければ、それら差別にのみこまれるしかありません。闘うことをしなければ、ダリット女性たちは絶望の中に置き去りにされるだけです。

そのため、本報告は、ダリット女性の闘いに焦点を当てます。最初に、ダリット女性たちの闘いから見ていきます。しかし、その闘いは彼女たちの生活全般に及ぶため、この報告書だけでは到底網羅できないことも事実です。したがって、本報告では、ダリット女性の差別と排除の背後にある全体像を歴史のおよび文化的文脈より捉えていただけるよう、彼女たちの闘いの一部をご紹介します。次に、グローバル化におけるダリット女性の権利侵害を、生計の権利を含む社会的経済的権利の分析より見ていきます。この侵害はますます強化され国際化されています。

最後に本報告は、複合差別と取り組む民衆運動をベースにしたダリット女性の闘いをとりあげます。また、本報告の中で、全国的に知られている事件のみならず地域社会におけるダリット女性の問題の事例を紹介します。

1. ダリット女性の闘いの路

1-1. ヒンドゥー教におけるダリット女性差別

世界が近代化されたにもかかわらず、人間性を奪い残虐な形態の差別を固定化させてきた古くからのカースト差別は今も続いています。それを止めさせるための法制度が存在するにもかかわらず、差別の慣行がはびこっているインドでは、1 億 6 千万人のダリット人口（その 49.96% は女性）が今も差別に苦しんでいます。ダリット女性が受ける差別は人種差別に類似しています。前者は一つの特定の社会に生まれたことで不可触民として差別的処遇を受け、後者は皮膚の色で差別を受けています。カースト制度はダリット女性を「不浄」であり、それゆえ不可触であると断言し、社会的に排除してきました。これは女性の権利の全面的な否定であり侵害です。

ダリット女性は三重の差別を受けています：出身カーストゆえに不可触民あるいはアウトカーストと

して扱われ、女性としてジェンダー差別を受け、不平等な賃金格差による低賃金労働で貧困においやられています。ヒンドゥー教のカースト階層には4つのカーストが存在します。僧侶カーストのブラーミン、戦士のクシャトリヤ、商人のヴァイシャ、そして単純作業労働者のシュードラです。この4つのカースト階層の下に不可触民と呼ばれる別の人びとの集団がいます。不可触民の間でも女性の地位はさらに触まれ、不浄の概念と密接に結びつけられています。これは厳格で原理主義的なヒンドゥー教がカースト制度を通して奨励してきた概念であり、カースト制度の維持のために押しつけてきたバラモン（ブラーミン）の価値観です。

マヌ法典、アタルバ聖典、ヴィシュヌ法典をはじめとした多数のヒンドゥー経典を編み出し、ブラーミン（最高位の僧侶カースト）によりそれらを厳格に守ってきたことで、男女平等の実現にはほど遠い社会が作られました（Agarwal:1999）。現インド憲法の起草者である B.R. アンベードカル博士も彼の論文「ヒンドゥー女性の盛衰」でそれを明らかにしています。博士は、インド女性の苦しみの根源はこれらヒンドゥー経典にあるとしています（Agarwal:1999）。マヌ法典などの経典は人びとを階層化されたカースト制度に区分し、男女間の不平等を唱えています（Thind:2000、Agawal）。マヌ法典では、女性には教育、独立そして財産の権利がないとされています（Thind:）。それはダリット女性を性の対象として扱うことを正当化して、幼年結婚を奨励しているだけでなく、次ぎに引用する節に見ることができるように、女性に対する多数の残虐行為も正当化しています（Agarwal、マヌ法典）。

30歳の男は12歳の少女と結婚できる。24歳の男は8歳の少女と結婚できる。男としての任務遂行は、その婚姻年齢に妨げられるものではない。

(マヌ法典 IX.94)

少女、若い女性、さらには老女でさえ、一人で何もできない、それがたとえ彼女の家のなかであろうとも (マヌ法典 V.147)

女性は幼年期は父親に守られ、青年期は夫に守られ、老年期は息子に守られる。女性は自立にはまったく不向きである (マヌ法典 IX.3)。

ダリット女性の殺害はブラーミンにとっては軽犯罪であり動物の殺害と同等であると規定されています（マヌ法典）。不可触民の殺害が軽犯罪として正当化されるならば、彼・彼女たちが生涯受ける扱いはどれほどのものかを想像するのは難しくありません。

男性支配の社会において、ダリット女性たちはカーストだけではなくジェンダーによる想像を絶する抑圧を受けてきました。マヌ法典やその他の経典に定められた掟は、ダリット女性が上昇できる経済的、政治的、社会的、教育的そして個人的なチャンスすべてを閉ざしています（Thind）。マヌ法典にある恐ろしい規範は、インド人口の多数派を占める上位カーストにとって有利な内容であるため、ヒンドゥー教の中に組み込まれました。今日でさえ、ダリット女性に対する深刻な抑圧と搾取が続いています。マヌ法典の規範はダリット女性の教育水準にも計り知れない影響力をもっています。

1-2. ヒンドゥー文化とダリット女性の闘い

一方、歴史とは関係なく、伝統的文化であれ現代文化であれ、文化は民衆が規律や価値や規範に対してどのような立ち位置にいるかを反映しています。文化は静物ではなく、アイデンティティや共通の体験とともに動的に変化しています。これまでは、家族、宗教、教育が文化の構成要素でした。今、文化はメディアによっても影響されます。儀式は常に民衆が行うものであり、それによって生きていくことの意義が強化されます。伝統的文化は民衆が日々の実践をとおして伝承してきたものであり、同時に他の文化との相互作用の影響を受けながら変化を遂げてきました。それに反して、帝国主義的文化は制度

化されたものであり権力の証しとなっています。被抑圧者の文化は自由を求める文化であり、支配者文化への抵抗です。伝統的文化は民衆の生活の連続性を持ち、民衆自らが採用した道德規範を尊重します。民衆の文化は多様性の文化であり、その他の文化を凌駕します。そうなるには、地方の文化に敏感で、地方分散された政治的構造が伴います。オルタナティブ文化の政治は文化のおよび社会的変革につながります。本質的にインドは多数の文化のホームベースであり、それら文化は相互の接触を通して豊かになってきました。インド文化はドラヴィダ文化から派生しています。インド文化は生きており、アジア文化形成に重要な役割を果たす力をもっています。

浄・不浄の教義と概念でダリット女性の品位を貶めてきたヒンドゥー教の歴史は、文化にも影響力を行使し、ダリット女性の生活環境の変化に触媒としての機能を果たします。ヒンドゥーを支配的モデルにさせるサンスクリット化により、ブラーミン的慣行の理想と信条はダリットに押しつけられ、不可触の慣行をもつ生活様式の取り入れが行われてきました。サンスクリット化はダリットにとって異質の信仰ですが、ダリットの精神性はサンスクリット的な精神性にとって替わられています。ダリットの死生観は連続性の言葉で表されます。生と死の連続性がダリットの精神性を支えてきました。

ブラーミンの文化はダリットのアイデンティティと完全性を損ないます。それはダリット文化を豊かにするのではなく、滅亡に追い込みます。ダリット文化は抵抗の文化であり、未来を示す文化です。ダリット文化は特定の個人や特定の生き方に支配されるものではありません。ダリット文化にはダリットの集団としての生活の歴史が反映されています。近代化は消費主義と市場経済を導入し、民衆の文化、とりわけ農村地域のダリットの文化の精神、価値体系、賞賛、表現を破壊してきました。伝統的文化は人びとの生活様式であり、生産様式です。しかし、帝国主義的な近代文化により、生産様式は消費を満たす道具に変えられました。それは伝統的文化を新植民地支配下に置くことであり、決して民衆の文化ではありません。

さて、妻の役割とは何でしょうか？家族の長は誰でしょうか？妻は夫のためにだけ尽くし、夫を名前で呼ぶことさえ恐れています。不妊症の女性は「悪い兆し」であり、誰よりも劣り、社会の元凶であると見なされています。思春期は女性の生涯において「花咲く」時代であると言われていています。受胎：女性は種がまかれるのを待っている床として表現されます。既婚女性は従順で受身な妻の枠にはめられます。母親は子どもを育て、良き妻を演じ、息子を立派に育てよう期待されます。受胎を伴うセクシュアリティは社会的に認められますが、同性愛などの性行動は逸脱、邪悪、異常であると見なされます。社会は複数の形態の性行動を実質的には認めても、社会的には認めません。カーマ・ストラ（注：古代インドの愛の経典といわれている）などの性愛を扱った小説は同性愛の存在をほのめかしています。

多様なセクシュアリティはヒンドゥー寺院の彫刻に多数見られます。それは生を肯定するものであり重要な意味をもちます。道德規範は人びとが歴史を通して構築してきたものであり、家父長制により与えられるものではないことを示しています。マドレイの女神ミーナクシも結婚しています。すなわち、どのような立場にあろうとも女性は結婚するものとされていて、結婚によって女性を家に閉じ込め、男性に権限を与えてきました。

多様なセクシュアリティはヒンドゥー概念のある部分では讃えられてきましたが、原理主義的ヒンドゥー主義はセクシュアリティにおいても多様性を排除します。特に、下位カーストのダリット女性はすべてのカーストに属する男性の性的「私有物」として扱われます。ダリット以外のカーストに属する女性は「良」として、社会的地位の低いダリット女性は「不良」として扱われます。ダリット女性は下位にあるから他のカーストの男性はいつでも性的に利用できると考えられています。ダリット女性は暴行されても当然であるとみなされる一方、上位カーストの女性たちは純潔で貞節であるとみなされています。上位カーストの女性の貞節は、上位カースト文化の重要事項です。下位カースト女性は貞節とはみなされていません。性的な純潔は「高潔」なカーストに期待されるものであり、社会はそれを称えます。

ダリット女性はダリット男性よりも厳格に儀式に従います。ダリット女性は大地と結びついています。額を地につけ、水と泥の混ざったろ過水を赤ん坊に与えます。彼女たちは生命の源泉である大地と直結しています。木々を崇め、ウコンと石で飾りつけた老木を拝みます。祭りの文化的プログラムはダリッ

ト女性が恍惚状態（あるいは“とりつかれる”）になる唯一の瞬間です。その時だけ、彼女たちは本心を吐露し、他のカーストの男性や夫の悪口を言い、アラックと呼ばれる地酒や鶏などのご馳走を要求し、女神のように振る舞います。ダリット女性は豊作を願って大地を拝みます。ダリット女性の踊りはクンミと呼ばれ、クラヴァイという歌が伴います。この歌は彼女たちの労働の歌であり、自然と近い存在にあることを示しています。彼女たちは祖父母、母そして子どもについて歌い、歌の中で地主をののしります。一日の仕事を終えれば、女性たちは一緒に座っておしゃべりをします。会話の中で、また口喧嘩の中で、彼女たちは昔ながらの言い回しをふんだんに使います。お互いのことをからかい、間もなく結婚する相手の男性のことをからかったりします。こうして彼女たちはかかわりあいます。相手と呼ぶとき、彼女たちは個人の名前ではなく自分から見た関係で呼びます。子どもが生まれたら歌を歌い、娘が初潮を迎えたら歌を歌い、家族が亡くなればその死を嘆く歌を歌います。こうした慣習は他のカーストの女性には見られません。

ダリット女性は強健で、子どもをたくさん産みます。ダリット女性は男性と同じように働きます。だからこそ、彼女たちは男性支配に反対し、男性よりも強いことを示します。ダリット女性は生きるために一生懸命働きます。彼女たちは心が広く素朴です。利用されることはあっても、決して誰かを利用しません。彼女たちはとても温厚です。彼女たちが普段接する相手は、子どもや夫などの家族、彼女たちから農作物を買う仲買人、彼女たちに仕事を与える地主、そして冠婚葬祭のときに会う親戚です。そして今、彼女たちはこれを越えて、大会、会議、セミナー、研修に出かけます。そこで他所から来た多数のダリット女性たちと会います。

ダリット女性は文字の読み書きができません。彼女たちは大地に関係した仕事のことしか知りません。政治参加も1パーセントも満たしていません。彼女たちは投票者でしかありません。国のことについて、他の民族について、他の言語について学ぶ機会をもっていません。すべてのダリット女性が運動や政党に関わっているわけではありません。彼女たちは政治に関係していません。ダリット女性のリーダーシップは男性が牛耳っています。ダリット女性は自分たちだけの言葉をもっています。大地の言葉を守ってきました。彼女たちには、お互いの間で決して敵は作らないという独自の正義があります。長年、彼女たちは大地の儀式に従ってきました。彼女たちは他のカーストの女性のように男性に頼ったりはしません。ダリットの男性が鋤を手に入れば、女性は土を入れるかごを持ちます。どのような仕事でもダリット男性と女性は同等に働きます。ダリット女性は労働者です、夫の奴隷ではありません。ダリット女性はとても強い抵抗の力をもっています。

ダリット文化はアーリア人の侵略により破壊されました。ダリットはブラーミン文化の支配を耐えくぐらなくてはなりません。浄・不浄の概念に基づいたサンスクリット文化は、差別され抑圧されてきたダリットのコミュニティ、とりわけ女性たちに押し付けられました。ダリットたちは抵抗の闘いを通して、支配文化により滅亡の淵まで追いやられた文化を生き返らせました。ダリット文化は解放、自由、連帯、平等であり、抵抗の文化です。ダリット文化は様々な形の劇に残されています。それらは革命的で、刺激的で、政治的行動へとつながります。

ダリット女性はマタマと呼ばれる女神に踊りを捧げます。しかし、踊り手はエロチックな格好で踊るものと期待され、大抵は性の餌食にされます。これは宗教が認める買春です。6月になれば5日間続く寺院の祭りがあります。他のカーストの喜捨で建てられたダリット寺院の祭りは、やはり他のカーストにより執り行われます。女神を載せた二輪車を他のカーストの男性が担ぎます。祭りを楽しむのは他のカーストの人びとです。祭りの5日間、ダリットの少女は女神に捧げられます。女神の治癒力が少女たちの病気を治すと信じられているからです。病気が治れば、子どもは女神と婚姻を結び、マタマという名前がつけられます。彼女はマタマの複製になるのです。その後は、公共の所有物として扱われ、ばかにされます。彼女たちは公衆の面前でからかわれ、生まれた子どもたちは学校でいじめられます。

地域社会の中で、マタマは社会的にも経済的にも搾取されています。彼女は誰からの援助もなく、一人で生きなければなりません。ダリット女性は踊り子になり、性の餌食にされ、病気以外の何も残さないまま一生を終えます。

ブラーミンの支配文化はデバダシの習慣をダリットのコミュニティにまで拡張しました。タミルナドゥ女性運動（TNDWM）は、マタマの問題を公けにしたことで、ダリットの男性からも嫌がらせを受けています。家父長的規範をもつダリット運動は、TNDWMの女性リーダー“一人ひとり”に公然と攻撃をかけてきます。貼り紙、集会での演説、脅迫状などで彼女たちは非難されます。TNDWMは、ヒンドゥー至上主義に影響を受けたカースト的で家父長的な地域社会からの嫌がらせを受けてきました。ヒンドゥー至上主義は他の宗教への嫌悪と拒否を植え付け、カースト制度を通して搾取的で支配的な文化を維持してきました。

2. ダリット女性の現代的抑圧 — グローバル化の波の中で

2-1. “排除”を生み出す特別経済区（SEZ）

現在、インドには延べ13万4千ヘクタールの面積を有する67の特別経済区があります（ファイナンシャル・エクスプレス2006年8月30日付）。特別経済区への土地の譲渡への対価を地主たちは受けている一方で、小作農のダリット女性たちは仕事を失い、土地から追い出され、路頭に迷っています。

ダリット女性にとって、国や大企業の経済成長の「経済的浸透効果」を受けることは幻想であり、決して現実ではありません。経済効果からの疎外はインド中の農民および普通の人々の間に不満を広げつつあります。その一方で、国は企業の代理人のように振る舞っています。市民生活に直接的な責任がある州政府は、企業の代弁者だけではなく、まるで企業のように行動しています。

州政府は特別経済区に利用できるよう、農地、沿岸規制ゾーンにある海岸沿いの土地、塩田、森林地帯を収用しています。特別経済区のためにとりあげられた土地のうち、工場に使用されるのはわずか35%で、残りはリクレーションや住宅のために使用されています。住民は不満の声をあげますが、州政府からの圧力は強まるばかりです。

西ベンガルにあるナンディグラムでは、サリムグループの化学工場建設のために州政府が土地を取りあげたことに抗議した村人たちが弾圧を受け、17人が銃殺されました。この内、12人はダリットでした。ナンディグラムの人びとは、調査のために村に入った市民委員会のインタビューで、毎日報復の恐れを抱いて生活していると答えました。調査団は一緒に村で夜を明かしてほしいと懇願した女性たちが、とりわけ強い恐怖を抱いていることを知りました。

州政府は土地をもたないダリット女性に、土地の権利も所有権も取り戻そうとはしません。経済特別区の推進者たちに渡された土地は千ヘクタール以上になり、明らかに土地改革法を違反しています。経済特別区は地元のダリット女性に雇用を創出することはありません。熟練の教育を受けた労働者を雇用するため、ダリット女性は排除されます。未組織セクターのダリット女性などの中から経済特別区に雇用される人はいないでしょう。

また、タミルナドゥのトゥティコリンでももう一つのナンディグラムが起きようとしています。ササンクラムでのタタ社酸化チタン工場建設に地元から大きな反対の声があがっていますが、与党議員は地元のパンチャヤットリーダーたちに建設を受け入れるよう強い圧力をかけています。また、パンチャヤットのリーダーたちが計画を認めていないのに、州政府は総工費250億ルピーの酸化チタン工場建設の合意書を企業と結びました。地元住民の声を無視した建設は、間違いなく地域で最も弱い立場に置かれている集団であるダリット女性の生活基盤を破壊します。

特別経済区を原因とする土地の対立とは別に、女性たちの安全はさらに脅かされています。工場で単純労働に従事するのは、ほとんどダリット女性など最貧層の人びとです。夜遅く仕事を終えて帰宅の道、女性たちは身の安全を心配しなくてはなりません。ヴィルプラン地区のウルンドゥルペッタイ・タルクでは、レイプ事件が3件起きました。一人はダリット女性で、他の二人は他カーストの女性です。3人とも大きな工場で働いており、事件は帰宅途中で起きました。

経済特別区はダリット女性から土地、政治的権利そして尊厳だけを奪っているわけではありません。教

育などの自己啓発の機会も奪っています。農村教育開発協会（SRED）が様々なコミュニティベースの活動を展開しているタミルナドゥ北部には、インド国内のみならず外国からの資本（ノキア、現代、三星、他）が経済特別区に投資をして大規模な工場を建てています。側にはチェンナイ、カンチープラム、バンガローなどを結ぶ高速道路が走っています。特別経済区の建設でまず影響を受けるのは土地をもたない農業労働者のダリット女性であり、何ら補償もないまま土地から追放されています。これら工場は熟練労働者だけではなく、ダリットの村から単純作業を行う労働者も雇います。その大半は若いダリット女性です。

毎朝、会社のバスがダリットの村の入り口で若いダリット女性を待っています。ダリットの少女たちは高等教育に進むよりも経済特別区で働くよう薦められます。ダリットの少女たちには実地研修も技術習得の機会も与えず、経済が下向きになれば「無学の女性」として失業の危機にさらされます。

つい最近、スイスに本社をもつ女性下着メーカーのトリンプが、インド亜大陸の市場を狙った製造工場を建てるために私たちの地域への投資を決定しました。投資決定の主な理由は縫製業における伝統的に質の高い技術をもつ労働力でした。農村のダリット女性は生活のために長年その技術を培ってきました。会社はできあがった女性の下着を1枚400ルピーから1,000ルピー（1ルピー＝約3円）で販売するそうですが、農村のダリット女性の手が届く価格ではありません。一方、縫製技術の提供者は不安定な条件に置かれたままです。

2-2. ダリット女性の職場—グローバル化の影響は村を覆う

政治経済のグローバル化は、特別経済区とは無縁のダリット女性の生活さえ侵食します。農業は花や園芸などの簡単な換金作物栽培に変えられてきました。毎日現金を必要とする小規模農家がそれに飛びつきました。ダリットの女性や就学年齢の少女たちは、極端な低賃金で雇われ花摘みの仕事をします。ダリットの女性や子どもたちは、有害な農薬や殺虫剤が散布された畑で無防備なまま仕事をし、健康を脅かされています。

サンタナ・ゴパラプランのダリット女性の健康に与える花栽培の影響に関する調査が行われました。村人によれば、花栽培はこれまで20年間この村の周辺で続けられてきましたが、とりわけこの5年は、花栽培に転換する農家が急速に増えたそうです。以前は落花生や米を栽培していた農家です。女性たちは、朝早く起きて家事を済ませ、花摘みの仕事に出かけます。朝の6時から畑で働き、朝食をとるのは早くて午前10時です。また、休憩なしの6時間、腰を曲げた姿勢で花を摘んでいるため、背中、腰、足に痛みをもったままです。殺虫剤が散布されるのは大抵彼女たちが畑にいるときで、その臭いは3日以上残ります。女性たちは不整なおりものや胃の不快感を感じ、子宮を切除したりさらには子宮ガンになったりもしています。

花栽培はダリットの少女の教育を受ける権利にも影響を及ぼしています。ダリットの少女たちは、学校に行く前、そして学校から帰ってきてから花摘みの仕事をします。家で復習ができないことは中途退学の要因となっています。殺虫剤による健康への影響で学校を休まなくてはならないこともあります。花畑で働く家族の誰かが殺虫剤で病気になり寝込めば、少女たちの通学にも影響を及ぼします。

輸出用の養殖業に使うため農地が取られてしまったダリットの村、コラトゥル村は、バッキンガム運河の逆流地帯にあり、タミルナドゥの東海岸線沿いのカンチープラム地区にあります。村人はカシューナッツを育て、逆流地帯で海老や魚を獲る生活をしてきました。2004年、チェンナイを拠点に活動する実業家のF.バルトロメが水産養殖管理局から許可をもらい、“中国養殖場”という名前の輸出用海老養殖場を開きました。養殖場は逆流地帯沿いに立っており、農地にまで侵入しています。養殖場からは未処理の廃水が流され、周辺の畑や川を汚染しています。

水産養殖産業は90年代よりインド政府の国際ビジネス戦略の一つとして、環境への配慮もないまま、推進されてきました。始まって直後の1996年、インド最高裁判所は環境上の理由のために沿岸地域の使用に規制をかけました。それには水系を汚染する可能性のある小川や逆流も含まれます。登録や許可

なしで養殖業を行うのは刑事犯罪になりますが、バルトロメの養殖場のように、規則違反でありながら許可を得て事業が行われているのが現実です。その原因は、法律遵守の重大さの認識の欠如とはびこる腐敗にあります。

コラトゥルの養殖場は法律で禁止されている農地に立っています。バルトロメは政治家と強いつながりをもっており、地域の輸出用海老生産量は増加の一途をたどっています。

伝統的作物を栽培してきた農地は輸出用換金作物栽培に転換されてきました。そして今、養殖場からの有毒廃水が農作物生産に影響を与え、ダリットの村人の日々の作物生産を直撃しています。また、これまでダリット女性が海老や二枚貝をとってきましたが、汚染によりそれもできなくなりました。これは日々の食料確保だけではなく生計さえも脅かしています。

有毒な廃水は植物や動物だけではなく、廃水で汚染された畑で働くダリット女性たちにも影響を及ぼしています。女性たちは皮膚病やかゆみ、視力低下などを訴えています。地下水が汚染され、ダリット女性たちは農業用と飲料用の適切な水を手にすることができなくなりました。仕事を失い生計を危うくされるだけではなく、女性たちは病気による痛みに苦しめられ、お金がないために治療さえ受けることができません。

コラトゥル村のダリット住民はこのように環境汚染から直接的な影響を受けていますが、同時に、養殖場反対に立ち上がる多くの村人への暴力や不当逮捕という間接的な影響も受けています。過去2年間で、人口4000人のこの村から、40人以上の若者が1ヶ月に4回、裁判のために出廷しなくてはなりません。それには裁判費用、弁護士費用、さらには裁判所への交通費もかかります。

ますます基盤が脆弱になった農村の伝統的な生活は、農業の転換だけではなく、人びとの移動も迫ります。タミルナドゥのヴェロア地区にあるチルマルプルでは、女性は半日の農作業でわずか12.50ルピー（1ルピー 約3円）しか得ることはできないため、1日で50ルピー以上稼げる仕事を求めて隣の州に出稼ぎに行きます。ダリット女性たちは年長の子どもに幼い弟妹の面倒を託さなくてはなりません。夫婦ともに出稼ぎに行きますが、行き先では学校や公会堂などで寝泊りをします。女性たちが一角で寝れば、男性たちは別の一角で寝ます。プライバシーはまったくなく、近くのポンプ場、湖あるいは池で体や衣服を洗います。出稼ぎは最長で20日程度続きます。請負業者が彼女たちを雇い、20エーカーの農地の収穫作業をまかされます。請負業者が自分のコミッションとして30%をとり、その残りが労働者に支払われます。出稼ぎ先では劣悪な労働条件の中、女性たちは自由と尊厳を失います。

3. ダリット女性の闘いのために

3-1. 市民社会の課題

ダリット女性の人権剥奪を目前にして市民社会はどのような行動をとってきたのでしょうか？不利益な社会層にある人びとの「生活向上」や「発展」のために、開発NGOおよび国際機関は最近「権利ベースのアプローチ」を盛んに強調しています。国連開発計画（UNDP）は、人間の発展の目標達成度を「モニター」するために、いわゆる「ミレニウム開発ゴール」を設定しました。しかし、それはいずれも私たちのアプローチではないしゴールでもありません。ダリット女性の状況に見られるように、人びとは生活のために苦闘しており、運動はそのような意味のない、上からの慈悲を拒否するべきです。事実、運動は、「闘争ベースのアプローチ」と「民衆のゴール」を追及しています。「権利ベースのアプローチ」は援助提供者の言葉です。これは各運動をそれぞれ蝸壺に追い込み孤立させます。民衆の運動は歩み寄りであり、対立ではありません。私たちはむしろ「闘争ベースのアプローチ」を続けるべきであり、それは人びとの生活に変化をもたらす運動を牽引します。

そのため、いわゆる「市民社会」にいる人びとはダリット女性の問題に取り組みません。市民社会は「権利ベースのアプローチ」の名のもと原理主義的になることで、範囲を狭めつつあります。例えば、バンガローで行われた独立60周年を祝う市民フォーラムでは、食事サービスのメニューの一つとして

ビフカツを出すことに対して多数が反対しました。しかし、実際にはビフカツを食べた人がたくさんいました。さまざまな取り組みの努力を排除するのではなく、包括性をもって対応することが重要です。複合的な差別や搾取と闘う人びととともに手を携えなくてはなりません。

3-2. ダリット女性の課題

農村教育開発協会（SRED）はそのために活動範囲を地元から国際レベルに至るまで様々に広げています。地元レベルでは、たとえばダリット女性に対するカーストに基づく虐待があれば、すぐに虐待に抗議する人びととともに行動します。ランガプラン村ではダリットの子どもたちの通学路をダリット以外の住民が封鎖して妨害しました。SRED はすぐに TNDWM などの民衆運動からなる事実調査団を送り、安全な通学路にするよう嘆願書を作りました。嘆願書を出そうとしているとき、あちこちから集められた警察がカンチープラム地区の教育事務所に送られ、そこに来たダリットの女性活動家を不当に逮捕しました。ようやく今年になり、子どもたちのために新しい通学路が開通しました。

アナンダプラムの村には橋がないため、雨期になれば水嵩が増し、ダリットの子どもたちは川を渡ることができません。昼間畑で働く母親たちは、子どもたちを学校に行かせなくてはなりません。2004年、SRED はその村でダリット・デイケアセンターを建てました。子どもたちはセンターに来て、遊び、歌い、絵を描き、学び、就学前の準備をします。基本的にはセンターは保育所として使われます。ダリット女性たちは、子どもを安全な場所に残して畑に出ていけるようになります。デイケアセンターを卒業したら、子どもたちは小学校に入学します。

センターは多用に使われています。働いている子どもたちは夕方、仕事のあとにセンターに来て勉強できます。通学している子どもたちは、放課後センターに来て、勉強をしたり遊んだりします。センターは会合にも使われます。アナンダプラムでは、日本からの支援でセンターが建ちました。

コミュニティ活動をしていけば、例えば、イルラ部族や採石場労働者の子どもたちもよく似た状況におかれていることがわかります。債務労働に縛られている家族、貧しくて学校に行かせることができず仕事場の採石場に子どもを連れていくしかない親、生活のために出稼ぎする家族、それら子どもたちは教育を受ける権利を否定されています。センターのプログラムはカーストフリーの環境になるよう特別の注意が払われています。子どもたちは差別的な意識、態度、振る舞いから守られています。

ダリットの子どもたち、とりわけ少女たちは高等教育を受ける場合にも困難にであいます。津波による経済的打撃により、寄宿舎で学ぶダリットの少女たちは進級が許されず、故郷に帰らざるをえませんでした。高校3年で優秀な成績をおさめたにもかかわらず、ダリット出身のバラティは適切な奨学金プログラムを見つけることができず、看護学校での勉強をあきらめなくてはなりませんでした。SRED はこれらダリットの少女が高等教育を続けることができるよう、広く支援を集めています。

3-3. 支配文化に対するダリット女性の挑戦

子どものデイケアセンターや奨学金を提供してダリット女性を支援することは、グローバル化の支配的文化に対抗する私たちの闘いの一つです。SRED と TNDWM はまた、マタマなど、カースト制度や家父長制の文化の犠牲者の支援も行っています。

マタマの問題に関する私たちの取り組みはその名前と社会的地位との取り組みから始まりました。マタマたちは「マタマ」と呼ばれることを拒否しました。最初の変化はマタマの名前を捨てて、新しい名前をもつことです。マタマ解放運動はダリットの少女たちをマタマに捧げる習慣を止めることから始まりました。祭りの間、マタマ解放運動の女性たちは寺院に行ってダリットの少女たちがマタマに捧げられることがないように、またすでにマタマとなった女性たちが公衆の面前で踊りをすることがないように見張ります。今では、寺院の祭りでは女装した男性が踊りを披露しています。

カヴェリラジャプランでは、村のリーダーが警察の力を借りて、寺院の祭りでのマタマの踊りを止め

させました。しかしそれは村人の反感を買うことになるため、誤った方法であるとマタマ開放運動は考えます。運動はマタマ寺院が存在する村々を訪問し、文化的なプログラムを行って村人に集まってもらい、マタマ女性たちがくぐりぬけてきた困難についてじっくりと説明をします。「マタマの習慣をやめましょう」と説得を続けます。

マタマ運動のリーダーたちは選挙にも立候補しました。多くの嫌がらせやボイコットにあいましたが、彼女たちは平等に立候補する権利があることを主張し、選挙戦をたたかいました。それ自体が彼女たちにとってエンパワメントであり、体制や地域社会や村の男性たちへの挑戦となりました。選挙に出たマタマのリーダーであるデヴィは、その経験を次ぎのように語っています。

「選挙中、私に反対する人は強硬に言いました：『なんで立候補したの？あなたはマタマだよ。一体誰があなたに投票すると思うの？』。私はこうした発言は一切受け付けませんでした。当選はしませんでした。とても素晴らしい経験でした。マタマの前にはたくさんの問題がたちはだかっています。私が村の議員になれば、マタマの権利回復に努めるし、マタマの習慣を止めさせたいです。雇用、教育、住宅など、マタマが奪われてきた基本的なニーズを政府から得るようにします。」

マタマ解放運動の女性たちは搾取の象徴である踊りを止めました。そしてその他のマタマ女性たちの解放のために活動を始めました。今、彼女たちは部落解放・人権研究所の「安田識字基金」のもと、リーダーシップ研修をうけています。研修により女性たちは支配文化に対抗できる力をつけています。

コラトゥルの女性たちも運動に参加して巨大権力に挑戦しています。彼女たちはコラトゥル・ダリット女性サンガを組織し、法廷闘争を行い、生活要求闘争も行っています。彼女たちのスローガンは「養殖場を閉鎖しろ」です。グローバル化は効率と競争の文化を讀えてきました。大多数のダリットや貧困層の人びとにとって、グローバル化はさらなる略奪を意味します。ダリット女性にとって、グローバル化経済への対抗は支配的なカースト制度と家父長制文化への対抗でもあります。

3-4. アジア農村女性会議の開催

ダリット女性に集中する問題に打ち勝つための草の根の取り組み以外に、SRED とタミルナドゥ女性運動は農村女性の評議会を組織しています。ダリット女性のうち、81.45%は農村地域に住んでいます。そのような中、グローバル化は農村地域の最も弱いグループにまず影響を及ぼします。そこはダリット女性が多数働いている地域です。しかしダリット女性だけが影響を受けるわけではありません。イルラ部族の女性、ナリクラヴァル、ドビス、そして漁村の女性たちも同じような状況の中で被害をこうむっています。インドだけではなく、グローバル化の政治と経済の中で闘っている農村女性は世界の他の地域にも多くいます。国際貿易、国際アグロビジネス、そして伝統的種苗の特許にかかる問題は、すべてダリット農村女性と他のコミュニティの女性たちの課題です。ダリット女性たちは世界貿易機関(WTO) が開催されていた香港に飛び、6つの閣僚会議で殺虫剤と遺伝子組換え食物の促進に反対する行動をとりました。アジア農村女性会議の大会は2008年3月6日から8日にかけてインド、チェンナイのアラコナムで開催されます。そこには社会から取り残された女性たちが様々な地域から集まり、農村女性の尊厳を主張します。権利ベースの資料には見ることでできない女性たちの訴えは、彼女たちが闘う力をつけてきたことを示しています。

この大会では農村女性の経験とグローバル化された世界における彼女たちの立場を分析して総括します。今年の7月、インドの女性組織のいくつかがSREDの事務所に集まり、農村女性に関する全国協議会を開きました。そこには当然ながら農村ダリット女性の最近の進展も議題に上がりました。7月31日から8月2日まで、アジアの国の女性たちがマニラに集い、農村女性の宣言を発表しました。もちろん、家父長的グローバル化に対する闘いの中で、カーストに基づく差別の問題も明確に述べられています。マニラ会議には部落女性など日本からの参加者はありませんでした。2008年3月の「権利、エン

パワメント、解放」を掲げた大会で、ダリット女性は部落女性とともに問題を分かち合えることを願っています。

アジア農村女性協議会はまた抑圧された農村女性の文化的表現の場でもあります。ダリット女性は「タップ」と呼ばれる太鼓をたたき、男性だけではなく女性も太鼓を叩くことを見せます。太鼓を叩くことでブラーミンの文化に抹殺されたダリット文化が蘇ります。太鼓の演奏とともに **Kolatam, Oyilatam, Karagattam, Thappatam, Paraiyattam** などの名前のついたダリット女性の踊りも披露されます。太鼓はダリット女性がすべての因習を打ち破るための言葉です。**Paraiyer** が叩く太鼓の **Parai** は支配文化が作った迷信で、ダリット女性を「不可触」として扱っています。ダリット女性は **Parai** を叩くことで支配文化への反抗を示し、**Parai** に新しい意味を吹き込みます。

ダリット女性は系統的で構造的で複合的な支配に反対するために太鼓を叩きます。太鼓を叩いて支配のイデオロギーを壊します。太鼓を叩いて単一文化をうちのめし、抑圧され踏みにじられ壊された人びとの文化を結集させ、人間の解放と、平等・自由・正義の「人間的」な社会の実現をめざします。タミルナドゥのダリット女性は、その他のマイノリティ女性たちとともに、カースト制度とジェンダー差別を生み出すグローバル戦略の家父長的原理主義を、太鼓を叩いて追放します。

{参考文献}

- Agarwal, S. (1999) "Genocide of women in Hinduism", Sudrastan Books, Jabalpur. (Available online: <http://www.geocities.com/realitywithbite/hindu.htm> retrieved on 8th Sept 2007.)
- Balakrishnan Rajagopal (2007) 'The caste system — India's apartheid?' The Hindu
- Chandra Bhan Prasad (2004) Dalit Diary: 1999-2003- Reflections on Apartheid in India, Navayana Publishing, Pondicherry.
- Fatima Burnad N. (2007) 'Land, Livelihood and Access to Resources', paper presented at Rural Women's Regional Consultation 2007, Manila, the Philippines.
- Jalindar Adsule, Dr. (2007) 'Globalisation: Dalits at the Crossroads', The Movement of India, Vol. II, Issue. 3, pp.7-8, and 20.
- Moses Seenarine (1996) 'Education of Dalit Women', a paper presented on Saxakali.com.
- Moses Seenarine (1996) 'Dalit Women: Victims or beneficiaries of Affirmative Action Policies in India – A Case Study', paper presented at a Brown Bag Lecture held by the Southern Asian Institute, Columbia University, on Apr. 10th 1996.
- Muthumary, J (2000) 'Dalit women in India', the paper prepared for International Conference on dalit Human Rights 16- 17 September, 2000, Shri Guru Ravidass Community Centre at 28 Carlyle Road, Manor Park, London.
- Nityanand Jayaraman (2007) 'Against All Odds: A Dalit Village's Fight Against Industrial Aquaculture', Speak Out! vol. June 2007, PCFS/PANAP, Penang.
- PC Vinoj Kumar (2007) 'Karunanidhi's Nandigram', Tehelka, 18 Aug 2007.
- Thind, G. S. (2000) "Our Indian Sub-Continent Heritage" Crosstown Press, LTD. British Columbia

2007年12月

(英日翻訳：小森恵)